

別冊 文藝春秋
新春特別号
Winter, 1893



麻

一九四〇年釜山

飯尾憲士

六十歳代の半ばをすぎた加賀谷民夫が、敗戦と共に消えた釜山中学校の少年時代に引き戻されたのは、Aからの突然の手紙による。

「お忘れでございましょうか。釜中の頃の同級生で、同じ級にいた者です」と書きだされているAというその同級生の顔を脳裏に手繰るより前に、真青な海が不意に加賀谷民夫の眼前に拡がった。

釜山港である。

永年想い起こすこともなかった風景が、無声映画のよう

学して昭和十七年に卒業するまで五年間学んだ。一年生のときシナ事変が勃発し、五年生のとき日本は大東亜戦争に突入していた。

校門をはいった左手に奉安殿があった。生徒たちは直立不動の姿勢で、深々と頭を下げる。天皇・皇后両陛下の御真影が安置されているのである。天皇は神様であった。校庭はしばしば砂塵を巻きあげたが、春になると染井吉野が爛漫と咲き乱れた。校庭の端に竹つと、遙かな視線上に釜山港が見下ろされた。

卒業してこの歳になりますまで、一度もお会いしておりませんが、同級生名簿の住所を頼りに、唐突の手紙を差しあげますことをお許し下さい。

同級生宛の手紙にしては丁重すぎる文面に、加賀谷民夫は歳月の隔たりをあらためて感じる。

釜中生でありました頃に起きたこと、それは、事件として受けとめるべきか、あるいは単なる「騒動」と呼ぶべきものなのかの、判然とした見解を私は持っていなかったのですが、どうしても真実を問ひ置かなければならぬ事態が生じまして、何人かの同級生の記憶をお借りしていますうち、近況を存じあげないながら、英語や博物をはじめとして抜群の成績でいたあなたの顔が浮かびました。……

どのような「騒動」なのか即座には思い当たらなかったが、そのことを探るより前に、印象に残っている教師たちの顔を加賀谷民夫は追っていた。

「バジャー（穴熊）」の綽名を奉られた独身で神経質の英語教師、「かぼちゃ」と呼ばれていた温厚で一面もあつた博物教師、「じいさん」と村夫子然の漢文教師、「シヤチ」「チャボ」「うま」「坊ちゃん」「クロちゃん」……

教壇で、化学実験室で、軍事教練の校庭で、各教師はぎょろりとした眼を眼鏡の奥に光らせ、あるいはおじいさんのような眼でやさしくうなずきながら、声はなく現れては消える。

瘦身の「バジャー」は短気なところがあり、チョークをばし、竹の鞭まで投げつけることがあった。女性に恋文を送ってはいつもフラれているという噂がたっていたが、ニヒルなところに好感を持っている生徒もわずかにいた。

「かぼちゃ」については、特に鮮明に憶えていることが加賀谷にはあった。大東亜戦争の始まる一、二年前から、軍関係の学校に進む生徒が多くなり始めていたが、夏期休暇で帰省した彼等は、海兵の短剣姿や陸士の半剪髪姿で母校にやってきては、教室に後輩をあつめて、俺のいる学校を受験せよ、とプチまくるのだった。

そのとき、教室にはいつてきた「かぼちゃ」が彼等に言ったのだ。

「お国のために尽くすのは、軍人だけではないのだよ」

静かな口調だった。

「あなたの背丈は、私と同じくらいであつたと記憶しております。一学年一五〇名が三つの級に分かれていました。五〇名のなかの中程の背丈ではなかったでしょう。おからだは丈夫ではなかったようでした。」

御父君は、釜山府内にございました重工業会社の技師の

に、次々と現れはじめる。——静かに入港してくる巨体の連絡船……湾に浮かぶ絶影島と呼ばれていた牧之島と、その対岸に架けられた当時東洋一といわれた開閉橋……悠々たる流れの洛東江……

かつて日本が併合してしまつた朝鮮であるが、追憶の風景は悲しく美しい。

校舎が現れる。

京城中学校につづいて大正二年（一九一三年）に開校した釜山公立中学校は、草梁町の商店街を通り抜け、小坂を登りつめた正面にあつた。名門校といわれたその木造二階建の校舎で、加賀谷民夫は昭和十二年（一九三七年）に入

方で、あなたは社宅から通学しておられたと思います。私が生まれましたところは、釜中所在地の慶尚南道ではなく、釜山南道の麗水でした。そのため、五年間下宿生活でした。釜中の近くに税関官舎がありました。憶えておられることと存じます。その税関官舎のそばの下宿屋でした。

私の故郷（敗れて故郷と書きます）は、豊臣秀吉の文祿・慶長の役、所謂倭寇で押し寄せてきた日本の水軍を、亀甲船で壊滅的打撃を与えた李舜臣將軍の本營地麗水、そして又、解放三年後の一九四八年十月、一党独裁の李承晩政権打倒、土地を農民に、の声を上げたため、国軍の制圧で百余名の死刑者をだしましたあの麗水です。

私は、日本が併合したその麗水で生まれ育ちました。昭和十七年に釜中を卒業、商大に合格して上京しました。在学中徴兵検査では甲種合格ということで兵役にも就きました。戦後都内の貿易商社に入社し、定年後は穀類の輸出入関係の会社に籍を置いております。

数年前に狭心症を患いましたが、現在は元気でございします。

釜中時代の或る事柄につきまして、同級生の記憶をお借りするとき、ご健康状態を含めてご都合をうかがってまいりました。同封の葉書で、是、のご返事を頂くことができませんでした。詳細をあらためて書かせて頂きます。

唐突の無礼をご寛恕頂くと共に、ご高配下さいませよう。お願い致します。

律義な文面は、遠慮がちに相手の気持ちにノックしてい

国立療養所で片肺の三分の二を切除し、六年間の療養生活を送って社会に復帰したとき、彼は三十歳代の半ばをすぎた。

自宅の近くの区立図書館に職を得て、五年間の勤務中に女子館員と結婚。館長の紹介で都心にある法律関係出版社の校正部員になったが、定年退職するまでの約二十年間、どうか病気とは縁が切れていた。

現在では、時折り腰に痛みがはしって、歩行が不自由になることがあるが、血圧も血沈も正常である。

釜中の同窓会には二十年程前に一度出席したことがあるが、酒も煙草もやらないので、皆と会うのが億劫になっていた。

横浜に住んでいらっしゃるAが、突然の電話で用件を述べることのない姿勢に惚えたい気持ちがあった。

加賀谷民夫は便箋をひろげると、相手と同じように卒業してから現在までの次第を書き、自分の記憶で役に立つことがあればと申し出た。都合をきいてきた返送用葉書も同封し、どなたかにお使い下さいように、と末尾に書き添えた。

一週間も経たず、Aから電話ではなくやはり手紙が届いた。加賀谷の早速の返事に対する礼が述べられてあり、「私たち健康な者たちが、おからだに関する半生に及ぶ間、襟を正して読ませて頂きました」と、他人と争うことなどない温厚だったAを想わせる文章だった。

奥様とお二人で静かに暮らしたあなたから、半世紀も

た。押入れから卒業アルバムを引っ張り出すまでもなく、トッブクラスにいた無口で端正なAの顔が浮かんでいてた。

2

加賀谷民夫は、老婆と二人で奥多摩に住んでいる。病気がちだったため、結婚は晩い。二十歳代半ばの息子はまだ独身で、都心にある銀行の寮にいます。娘は結婚して、大阪暮らしである。

Aの記憶の通りで、釜中時代彼はしばしば病欠していた。微熱がつづくと、からだがだるく、教員は大抵見学だった。

上級学校への受験を諦めて、卒業後一年間、社宅で寝た起きたりの生活をした。父親の東京本社帰任で、彼が私大の法科に入学したのは昭和十八年。翌年、本籍地東京で徴兵検査は丙種で、検査官から「非国民！」と一喝された。

敗戦。

郊外の家は、戦災を免れていた。

瘦せ細っていた。微熱がつづく。休学届けを出すと、秋田の母の実家の世話になった。大きい農家であった。

二年程して、復学。卒業すると、左翼系の週刊新聞社に入社した。朝鮮動乱（六・二五動乱）が起きた翌年で、社員は十名たらずだった。入社して三年もしないで倒産。そして、咯血した。

昔の記憶をお借りすることに躊躇を覚えました。が、ご好意に甘えて筆を執らせて頂きました。

先便で触れましたように、或る、事件（あるいは、騒動）の真実の内容について知らなければならぬと、昨年の暮れ以来一途な気持ちになっている次第です。

釜山府内の大新町にございました「公設グラウンド」を憶えておられることと存じます。釜中生の頃、その大新町のグラウンドで、「戦力増強競技大会」というものが開催され、釜山府内の四中等学校——日本系の釜山中学校と釜山第一商業学校、朝鮮系の東萊中学校と釜山第二商業学校——が参加して、釜中が優勝しました。

大会終了直後、東萊中の生徒を中心とする朝鮮系学校の生徒が、採点を不服として騒ぎだし、その折り、「朝鮮独立万歳」「天皇制打倒」「侵略戦争を止めろ」などのシュプレヒコールが観客席（応援席）から沸き起こったとする、「独立運動を自撃」と題した一文を眼にして、私は怪訝な気がしたのです。

この一文は、私たちの同級生が発表したもので、最近読む機会を得ました。私は、当日、風邪のため下宿で寝ておりましたので、騒ぎは見えていません。けれども、あの戦時下において、このような危険なシュプレヒコールが行われたのであろうか、級友たちは、独立運動を自撃したのであろうか、と首を傾げる気持ちでした。

隣国が解放されたことを心から喜ぶ者ですが、それにしても当日の真相を、在校していた一生徒として知りたい、

と思ったのであります。

「ご興味無いことでもございましたら、おたずねことを致すのは失礼かと存じます。お煩わしいことでもございましょうが、再び葉書を同封させて頂きます。ご返事をお待ちします。」

もしもご了解下さいましたならば、掲載されました一文のコピーの他、いくつかのものをあらためて送らせて頂きます。お手紙を拝見致しました折り、同級生の一文がまだお眼に触れていないように思われましたので。

色々のご事情でお断り下さっても、勿論異存などございませぬ。手前勝手なことを書きつらねましたことを、どうかご寛恕下さいますように。」

眼をとじる。

大新町のグラウンドで、そのような戦時色濃厚な競技大会が行われたことは、記憶にある。しかし、彼はグラウンドに行っていない。微熱がひかず、学校を休んでいた。何か騒ぎがあったらしいという情報は、帰宅した父親から聞いたような気がする。朝鮮人生徒が「天皇制打倒」など叫んだとしたら、大変なことである。新聞は伏せていたのだろうか。

詳しく知りたい、と加賀谷は思った。

その旨葉書に書き、着流しに半纏を羽織って家を出た。ポストは、多摩川沿いの径をしばらく歩いた小さい商店通りにある。

溪流は冷たそうである。五月から夏、秋にかけて賑わう吊り橋も、閑散としている。深山の木々の芽吹きは、まだ

ずっと先である。

帰宅すると書斎に上がり、押入れから古ぼけた大封筒を引っ張り出した。釜中時代のものがつめこまれてある。

折り畳んだ皺だらけの地図を抜き出した。「鎮海灣要塞司令部檢閲済」と印刷されている昭和十一年発行の「釜山府市街圖」である。

老眼鏡をかけただけでなく、拡大鏡まで手にする。

釜中のあった草梁町のはるか左手に、四角く囲まれた白地の一郭があり、「釜山運動場」と記入されている。所謂、大新町の「公設グラウンド」である。

大新町と草梁町の間に、いくつかの波形の不定形円が重なっている。丘陵地帯である。

校舎の背後の亀峰山を思いだす。松の木に掩われた五〇メートルたらずの高さで、美山とはいえなかったが、釜中生はこの亀峰山と共に五年間をすごした。峰の上に広がる空を教室の窓から指さし、「ギリシャの空に劣らないくらい美しい」と言った教師の言葉が耳に蘇る。

地図には名前が載っていないが、亀峰山の峰つづきに、鬼山と名づけられた丘陵があった。大新町に住んでいた生徒たちは、土饅頭の形の朝鮮人の土葬のあるその鬼山を越して、学校までの五キロの道を通学した。

大新町から草梁方面までは、市街を迂回する路面電車で五十分程であったが、戦時下電車通学は禁止されていた。やむを得ず利用するときでも、南は三駅手前の「釜山駅前」まで、北はやはり三駅手前の「釜山鎮駅」までで、それからそれぞれ「草梁駅」までの二キロの道を歩くことを

厳命されていた。

牧之島に居住していた生徒たちは、跳ね上がった開閉橋が下りるのを苛々して待ち、学校までの八キロを二時間ばかりで歩いたのだった。

加賀谷民夫が、恒例行事だった四〇キロマラソンを思いだしたのは、亀浦という地名を地図の上のほうで眼にしたときである。当時競歩とも呼ばれていたそのマラソンに彼は一回参加しただけであったが、一斉に校門を出ると、京釜線沿いに梨畑の多い亀浦まで北上し、右に進路を変えて、金井山の山道を走り、東萊温泉、東萊中学校の横を回って再び京釜線に出、一路学校まで南下する四〇キロの行程であった。彼は最後まで到底走れず、何人かと一緒に歩いたのだった。

戦局が熾烈になると、加賀谷たちが卒業したあとの後輩たちは授業どころではなく、松根油製造のために亀峰山で伐採された松の木を搬出、釜山港での荷役作業、高射砲陣地構築のための道路作り、等々に駆り出される毎日だったようであった。

とはいえものの、港町釜山の繁華街の映画館やカフェーは賑やかで、公設大市場には豊富な生鮮食品が並び、売り買いは喧騒であった。学校の近くにあった金魚屋の池、牧場、二輪の台車を牽いた牛車……

のどかな風景がよぎる。

けれども、土地をはじめ、自分たちの国の歴史、宗教、風俗、姓名などを根こそぎ侵された人々にとっては、重苦しい賑わいに映ったはずであった。市街から朝鮮衣袋の姿

が消えてゆきつつあった。朝鮮總督府は、日本語の常用を朝鮮全土に強要し、日本の和服を着、下駄を履くことさえ奨励した。

そのような皇民化政策の仔細を加賀谷民夫が知ったのは、戦後である。

玄海の女王といわれた関釜連絡船「麗霧丸」が釜山港に向けて航行中、米潜水艦により撃沈されたのは、就航して半年そこそこ、加賀谷一家が東京に帰っていた昭和十八年十月である。

加賀谷は、地図から眼をおこす。

このような暗翳が戦局にまったく見られず、戦果赫々としていた頃、朝鮮全土に憲兵や特高の眼が光っていたその一角で、しかも大群衆の前で、独立運動が朝鮮系中学生のシュプレヒコールで行われたと、同級生が文章で発表しているというのである。

3

コピーのつまっている大封筒が届いた。

眼鏡をかけて、Aの手紙をまず読む。

相変わらず丁寧な礼のあと、「投稿の筆者にご記憶ございませうでしょうか。同級生の、B君です」と、はじめ名前を知らせていた。

「おからだのため欠席しがちで、級友とのつきあいが薄かったようですので、はつきりとはご記憶にないかもしれませんが、卒業アルバムをお持ちかと思いますが、念のため顔写真をアルバムからコピーしました。」

写真に眼をあてる。

二年程後輩から制服は軍事色のカーキ色になったが、加賀谷たちは伝統の黒色(夏は霜降り)である。勿論丸坊主であるが、帽子もまだ戦前帽ではない。

光線のせい、Bの顎が細くどがつており、顔半分が翳になっている。

級友の誰とでもそうだったが、Bとも立ち入った話をした記憶が無い。

大新町のグラウンドに関する、B君の文章を眼にし、したのは、昨年の暮れでした。先輩の一人が、釜中に関する回想を同窓生の有志から集めて印刷しましたが、その記録集の中に、私たち昭和十七年卒業の25回生の一人として、B君がその文章を載せていました。

ご存じのように、1回生は大正二年開校時の方で、昭和二十年の敗戦で釜中の歴史が終焉を迎えたときの一年在学生は、32回生です。本来は33回生になるはずでしたが、敗戦の年の三月、28回生の五年生と同時に、四年生も戦時特例で卒業したので、回りが繰り上がったようです。

B君が九州にいたことを知りました。文章の中のいくつかの疑問点、特にシユブレヒコールが本当にあったか否か、更にあったとするならばその内容について確認したいと思ひ、手紙を出しました。

Bが内地の旧制高校卒業後、東北の帝大に進み、学生運動にも関係したが、戦後は九州の新制工高の教師、金属関係の工業試験場勤務などを経て、現在定年退職の生活を送っていることをAは知る。

八・五(点)、二位が東葉中学校(六八八点)となったが、あの減点がなかったら、東葉中学校が優勝していたはずであった。

閉会式に全員グラウンドに集合するよう指示があったが、東葉中学校と釜山第二商業学校の生徒は、観客席(応援席)から出ようとはしなかった。観客席に陣取った朝鮮系の生徒たちは、その場で審判の不当を激しく攻撃した。そのうち大きなシユブレヒコールとなり、「朝鮮独立万歳」「天皇制打倒」「侵略戦争を止めろ」と叫んだ。「天皇制打倒」は、「打倒天皇」だったような気もする。

中学三年生の私には、侵略戦争の意味すらまだ分からなかった。秋の夕日が落ちるにつれて会場は興奮に包まれ、暗くなるにつれて更に昂まっていた。

グラウンドの生徒たちは不安になってきたが、憲兵隊がきて護衛され、電車に乗せられて帰った。

その夜、東葉中学校と釜山第二商業学校の生徒の一部が集まって、審判長であった乃台大佐の自宅に石を投げ、氣勢をあげた。両校生徒八十名近くが逮捕され、六十数名が退学させられた。

この事件は、新聞には全く掲載されなかった。

こうした独立運動に遭うのは初めてで、中学三年生の私には強烈な印象であった。私には全く理解できない体験であった。スローガンの意味が分かったのは、数年たった戦後のことである。今振り返ってその事件を考えると、第一は当時の最上級生は五年生、その十七歳の少年達の指導による独立闘争であったこと、第二はシユブレヒコールにあ

「あなたは私と同様に競技大会には行かれていないようなので、騒ぎの実態を眼にしておられないわけですが、B君の文章に関して疑問を感じられた個所がございましたらば、おきかせ頂ければ幸いです。」

同封してあるコピーによると、大新町のグラウンドにおける釜山府内の四中等学校対抗の「戦力増強競技大会」の種目は、完全武装での土裏運動、手榴弾投擲、障害物競争等々の戦時色一辺倒で、大会終了後の採点をめぐっての騒動がことの発端のようであった。

題は、「独立運動を目撃」となっている。
(文中、傍点の年代をはじめ、いくつかの誤りがあるのを、加賀谷は後日知ることになる。)

「五〇年程前の、当時の植民地朝鮮の釜山での出来事である。昭和十四年の秋のことであった。日本系の釜山中学校、釜山第一商業学校、朝鮮系の東葉中学校、釜山第二商業学校の四校が、競技大会を行った。」

もともとこの大会は、朝日新聞社主催の全国中等学校野球大会の地区予選であったのが、昭和十二年に始まった日中戦争のため中止となり、代わりにこの競技が初めて試みられた。

午前中の競技(相撲競争)でエラーがあったということ減点された東葉中学校側は、エラーを承認せずもめたが、結局、審判長(配属将校乃台謙治大佐)の意見通りに減点させられた。

夕刻にすべての競技が終わり、一位は釜山中学校(六

るように目標を明らかに示した闘争であったことを、心にとめるべきであると思われる。

植民地朝鮮の南端にある釜山は、日本化が最も進んでいた都市であった。その昭和十四年は、紀元二千六百年行事の前年で、皇国意識が高揚した時期であったはずである。それにもかかわらず、朝鮮の独立運動はこのように中学生にも深く浸透していたのである。

五〇年前の中学生独立闘争と、今の韓国における民主化闘争との間には、連続とした関わりがあることを私は感じている。戦争中である昭和十四年ころは、日本内地での民主化のための闘争は殆ど潰れてしまっていた。にもかかわらず、植民地朝鮮での独立闘争は、十七歳の少年たちの手に引き継がれていたのである。

民族としての彼等の自負を、今更のよう感じている。

加賀谷民夫は、座椅子の背凭れに倚る。

乃台大佐の邸に石が投げつけられて、家屋の一部が破壊されたという話は湯宅した父親から聞いたが、観客席のシユブレヒコールについては、何も聞いていない。

不正審判があったようだった。騒ぎの一端もなった担架競争に出場した釜中生の回想文がコピーされていた。読み手の判断を客観的なものにしようと、Aは気を配っているようであった。

その担架競争は、担ぎ手四人のなかから一人ずつ交替で乗せ、四〇〇メートルのグラウンドを一周する競技のようであった。三〇〇メートルを過ぎた頃、後棒を担いでいた

一人が力尽きて竹棒を放したため、乗り手はもんどりうって地面に転がり、惨めな敗北に終わったことは、説明の要もありません」と、竹棒を放した当事者は書いていた。

一位は東葉中学校であった。

ところが、競技のやり直しとなったのである。「東葉中学は、競技前にマムシ粉が何かの強壮剤を生徒に飲ませていたのではないかと、疑義を挟んだのは、釜中の教練教官の予備役中尉である。」

東葉中学校側の抗議を無視してやり直しの結果、釜中が一位となる。

「この逆転劇にショックを受けたのは東葉中学の皆さんでしょう。私たちがすらもう一度走りながら、何故？ どうして？ と首を傾げたほどでしたから、不信を募らせたのは当然であると思います。」

筆者は、はつきりと不正を示唆していた。

三十歳代の予備役中尉は、精悍な相貌だった。応召後、ビルマで戦死したことを、加賀谷は戦後人づてに聞いた。配属特校の乃台大佐は、小肥りで温厚な人だったが、上級者として怨みを負う仕儀になったのだろうと、加賀谷は想像する。

不正審判を怒り、閉会後観客席からグラウンドに下りてきて走りこんだまま帰ろうとしない東葉中の生徒たちに、「君たちが勝ったのだから、もう帰ろう」と、校長（日本人）がなだめる。

別の記録によると、釜中の一教師さえ誤審の修正を乃台大佐に迫っている。陸士、海兵から帰省して、校内で氣勢

くなるにつれて更にシュプレヒコールが昂まっていった。と、五十年前の光景をしっかりと脳裏に刻みつけている感じの、リアルな文章である。加賀谷は、その光景を描こうと努める。

朝鮮系中等学校において、低学年生徒はいざしらず、高学年生徒の胸の奥には、日本国に対する呪いが蛇の目のように光っていただろう。

その気持ちは、加賀谷には理解できる。

祖国が日本に併合されて植民地となった屈辱と怒りは、少年たちにあつたはずである。あつて当然のことである。自分の国の言葉を口にしてはならない。日本の服を着るようと云われ、更に、アマテラスオオミカミを拝まなければならぬ。自分の国を併合した天皇の写真に、深々と頭を下げ、我等は皇国民なり、と斉唱しなければならぬ……。

戦後、左翼系の週刊新聞社に勤務中、そしてまた六年に及ぶ療養中に、加賀谷が日本と朝鮮に関する文献を読み漁ったのは、日本が植民地化した隣国で少年時代を送った者の義務感からでもあった。

相手の身になって考える癖がついていた。

日本が植民地となり、自分の名前が創氏改名させられた、あるいは、それまでの学校名が侵略国の校名に統一されてしまったら、と。

明治四十三年（一九一〇年）の日韓併合以来、朝鮮の学校制度は、朝鮮教育令で次々と変わったが、昭和十三年の三回目の改定で、それまでの「普通学校」が「小学校」

をあげる者を論した「かばちゃ」先生である。相手が軍人であれ、長いものに巻かれることのできない人だったと、加賀谷は恩師を回顧する。

「不正審判は確かにあったわけだ。しかし……」

彼は、Bの文章に戸惑う。あの釜山で、このような激しいことが起きたのだろうか。

コピーはまだはいってない。

シュプレヒコールに関する別の方面への投稿文である。Bは、同じ内容の投稿を、昭和三十年代からはじめていた。

最初は、九州の新制工高教師の頃生徒の文芸誌に、次は在日朝鮮人刊行誌に、そして、釜中の回想記録集に投稿する九カ月前、社歴を誇る大手出版社の月刊誌に――。

Bは、A宛の返事に、「応援席の中からのシュプレヒコールをききました」とAの疑問を斥けており、「天皇制打倒」或いは「打倒天皇」の言葉の激しさに驚きました。と、はつきり書いてあった。

4

「朝鮮独立万歳！」

「天皇制打倒！」

「打倒天皇！」

「侵略戦争を止めろ！」

怒号が加賀谷の耳を刺す。

「秋の夕陽が落ちるにつれて会場は興奮の色に包まれ、暗

に、高等普通学校」が「中学校」となる。昭和十六年の大東亜戦争勃発の年には、朝鮮の「小学校」も内地流に「国民学校」と変えさせられる。内鮮一体、という名目の皇民化政策である。

昭和十四年頃から始まっている内地の炭鉱への強制連行、大東亜戦争以後一層激しくなった、女子挺身隊、という名目の、従軍慰安婦、徴集、いわゆる、娘狩り、等の総数は百万人を遙かに超すといわれているが、死亡者を含めその数字さえ明確にされていない。

朝鮮全土の各地で、憲兵や警察官から有無を言わせずトラックの荷台に積み上げられた者たちは、釜山港から内地の炭鉱へ次々と送られた。人間の尊厳などは無かった。

大新町のグラウンドで騒ぎを起こした生徒たちは、当時これらの数字など知らなかっただろう。けれども、釜山港から出て行く船に積みこまれる同胞の大人たちの姿を見たはずである。家庭では朝鮮語の両親の会話から、滾る思いを胸に秘めたかもしれない。

日本人が奪った土地は、田畑百万余町歩、山林千万余町歩。

加賀谷は、併合前後に起きた韓国民衆のあとを絶たない反乱を想い起こす。

●明治四十二年（併合の前年）十月二十六日、安重根はハルビン駅頭で日本国の元老伊藤博文を射殺して、死刑。●併合九年後の大正八年三月一日、京城（現ソウル）のパコ公園で独立を叫んだ市民たちは、軍隊と警官の発砲

で次々と死亡。この「万歳事件」(三一運動)を契機として、爆弾闘争を主力とする秘密組織「義烈団」が結成される。

●大正九年九月、朴載赫が釜山警察署に投弾。朴は獄中で断食して死亡。

●同年十一月、義烈団員崔寿鳳が密陽警察署に投弾し、死刑。

●大正十年九月、朝鮮總督府庁舎に爆弾が投げこまれる。

●大正十二年一月、クリスチャン金相玉が、鍾路警察署に投弾。銃撃戦の末、自決。

●同年九月一日の関東大震災の際、朝鮮人六千数百人が殺害される。その報復を誓った義烈団員金社燮が、二重橋に爆弾投擲。無期懲役を宣告されたが、「死刑希望書」を提出。

●大正十五年十二月、羅錫時が土地収奪に一役買った東洋拓植会社と拓殖銀行に投弾。銃撃戦で三名を射殺したのち、自決。

●更に、昭和天皇の殺害を企図した昭和七年一月八日の「桜田門事件」の李奉昌、死刑。

厳しい弾圧で、テロ行為は次第に影を潜める。その弾圧の手は、反戦、反国家的思想者である日本人の検挙、拷問へとひろがる。

天皇は、神聖にして侵すべからざる現人神であった。

を再び刺した。

老いてもまだ脳裏に静かに蘇る釜山港や、校舎の背後の龜峰山や、遊びを楽しんだ松島や、そしてギリシャを想わせる担任教師が嘆息した朝鮮の空が、牙を剝いた怒号の背後に霞んで遠ざかった。

便箋をひろげた。

Aの手紙によると、競技大会の現場にいた同級生たちに、シュプレヒコールに関して問い合わせられているという。

その返事を読みたい。逮捕された東葉中や釜山二商の生徒たちの当時の刑の内容も知りたい。

投稿文中の誤りに、一カ所だけだが加賀谷は即座に気づいていた。

ペンを執る。

大新町のグラウンドで四校対抗の競技大会が開催されたのは、昭和十四年と書いてありますが、あの大会は皇紀二千六百年とやらの奉祝行事の行われた昭和十五年の秋に開催されました。微熱がつづいて学校を休み、大会にも行くことができなかったのが、四年生のときです。ですから、昭和十五年です。三年生ではありません。

B君の誤りです。

折角のお問い合わせにお答えできるものはこれだけで、申し訳なく思います。

投稿文の内容につきまして、大変興味がございます。知りたいことを数多一方的にお願いして恐縮でございます。まことに大変なシュプレヒコールです。権威ある出版社の

不慮の火災で奉安殿が類焼し、天皇・皇后兩陛下の御真影を焼失したことを詫言びて、校長が自殺。群馬県での陸軍特別大演習において、桐生市内を視察する天皇の車を先導した一警部は、順路を僅かに間違えた責任をとって自刃。

天皇から賜った軍人勲章を、中隊全員の前に奉読した陸士出身の新任の少尉は、朕が訓に違ひて、という個所を、朕が訓を守り、と、長文の勅諭の中で僅かその一カ所を誤読しただけであるが、連隊長以下に「御詫状」を認めて、拳銃で自決。

戦時中、国民は天皇のために、親や妻子や土地を犠牲に、死地に赴いた。あの戦いで死んだ者は、二百数十万人。

「二・二六事件」で逮捕された青年将校たちは、銃殺直前、天皇の命によって殺されるにもかかわらず、「天皇陛下万歳！」と目隠しされたまま、天皇の御代を讃えた。

神であるその天皇を、戦争、酣の頃に朝鮮の中学生たちが「打倒天皇！」と叫び、「朝鮮独立万歳！」とシュプレヒコールしたというのであった。

当時、詳細な事件の報道が無かったのは、朝鮮全土への反日の波及を惧れたためであろうか。しかし、Bの投稿文には書かれていないが、たとえまだ少年であるとはいえ、みせしめを含めて極刑に近いものが行われたはずである。逮捕された生徒八十名近く、退学になった生徒六十数名とあるが、思想犯であるからには、家族にも官憲の手がのびていないはずはない。

「打倒天皇！」という怒号が、眼をとじている加賀谷の耳

月刊誌が、最近号において当時のことを綴った投稿文をそっくり掲載していますが、内容の裏付けをとったのでしょうか。

まさかとは思いますが、投稿文の通りですと、当時拷問で死んだ生徒もいるのではないかと、胸が痛むのです。万世一系の皇紀二千六百年という年を迎えたことを、少年の頃誇らしく思った記憶がある。明治になって皇国史観派の学者たちによって作られた、西暦年号に六百六十年プラスしたその皇紀年号は、敗戦と共にあつたけなく消えた。そのとき加賀谷は、なぜだか恥ずかしくなったのだ。

投稿する前に調べればすぐにわかる大会開催年代の些細な間違いを、四回の投稿文にくり返しているBを責めるより、やはり加賀谷は恥ずかしい気持ちになつていた。

投稿文の中で首を傾げる個所が、二年に及ぶAの調べで次々と露呈されることとなる。

5

中身の嵩張った郵便物がAから届いたのは、三カ月経った秋の終わりの時分だった。

季節の推移を、加賀谷は書斎の窓外の風景で愉しむようになつていく。歳のせいである。白く岩を噛んでいる溪流も、だいぶ冷たそうである。対岸の森の随所に、黄葉や紅葉の一群が炎えている。

Aの手許に、同級生からだけではなく、先輩や後輩の何人かからの返事が届いていた。

「あの騒ぎは、僕等が四年生のときです。つまり、昭和十五年（一九四〇年）のことであります」と、同級生は答えている。二年先輩の23回生と、三年先輩の28回生の手紙は、昭和十五年開催ということをも更に決定的なものにしていく。

23回生は、一切記憶していないのだった。昭和十四年開催であれば、当時五年在学中であるから、当然記憶にある。昭和十五年三月に卒業しているから、その年の秋の大会は知らないのである。28回生は、昭和十五年に入学している。その彼等が記憶していた。昭和十四年には、まだ入学していないのである。

Aはこれらの返信をコピーしてBに送ると同時に、次のような手紙を書いていた。

そのコピーが同封されているのである。

『投稿の御文章、朝日新聞社主催の全国中等学校野球大会地区予選が、昭和十二年に始まった日中戦争のため中止になったので、その代わりに競技大会が昭和十四年に行われたとありますが、野球大会は昭和十五年八月、戦前最後の大会として甲子園で開催されています。』

その昭和十五年、慶尚南道代表の東萊中学と、慶尚北道代表の大邱中学の試合において、四対二で東萊中学が勝ちました。京城に於ける朝鮮代表選抜大会で優勝したのは平壤中学でした。尚、満州代表は天津中学です。

これらのことは、朝日新聞社の資料に残っています。「戦力増強競技大会」が、野球大会の代替えとして行われたとするのは誤りではないかと考えます。」

いる。

教室でも、運動場でも、その同級生はいつも控えめにしていた。その彼に辛くあたると同級生がいた。相手を侮辱する朝鮮語を、面とむかってしつこく浴びせかけるのだ。朝鮮人の彼は黙っていた。その折り、彼のそばに寄った一人の日本人同級生が囁きかけた言葉を、加賀谷はいまでも憶えている。

— PERSISTENCE (忍耐、我慢)

英語の「げた」先生が、授業中皆にくり返して教えた単語だった。生徒が悪ふざけすると、激しく叱りながら涙を流す先生でもあった。

Aは、観客席からのシュプレヒコールについて調査したことを、克明に加賀谷に報告していた。それは、まさに「報告」と思われる程の几帳面な内容であった。

「はつきりとは憶えていない」という返事もきいているが、シュプレヒコールがあった」と述べている者はいない。一年先輩の24回生（当時五年生）と、同級生、後輩の殆どは、「無かった」と書いてあった。教師たちにも問い合わせていたが、同様の回答がきていた。

一斉に叫んだとBが書いているその内容どころではなく、シュプレヒコールそのものを否定しているのである。Aは、調査結果をBに送ると共に、Aにしては珍しく自分の考えを直截に書いていた。

「天皇制、侵略戦争」という言葉は、戦後に流布されたもので、戦時中の一九四〇年に釜山で叫ばれたとは考えられません。」

礼儀正しい文章である。

その底に、執拗な追及の気配を、やはり感じる。それにしても、あちこちに投稿をつづけたにしては、初步的な誤りが多すぎるように思われた。大学時代に学生運動を体験したというBの顔を、脳裏で探るのである。

同級生たちの手紙によると、五十年経った現在でも、消滅した母校に想いを寄せて、各地で同窓会が開かれているようであったが、釜山に入学した朝鮮出身生徒も、楽しい少年時代であったのだろうか、と彼は遠い昔に想いを馳せる。

小学生の頃、仲良しの朝鮮人の子供がいた。飲食店の息子で、普通学校（小学校）に通っていたので学校は別だったが、よく遊んだものだ。差別感など無かった。けれども中学生になると、朝鮮出身生徒は、日本人の生徒との間に、表面はともかく、気持ちの中で線を引いていたふしがないでもない、と彼は思う。

加賀谷の学年に、朝鮮人が一人いた。

朝鮮系の高等普通学校（中学校）に日本人の生徒がいたと同様に、日本系の釜山にも僅かながら朝鮮人生徒がいた。大正二年の開校から、昭和二十年の敗戦による閉校までの間に、四十名近い朝鮮人生徒が入学したことを、加賀谷は校史で読んでいた。

人なつっこい笑顔の朝鮮人だった。

入学時、加賀谷たちは制服の長ズボンが間に合わないの、小学校のままの半ズボンだったが、彼だけは普通学校で、当時の長ズボンなので、羨ましかったのを加賀谷は憶えている。

加賀谷が思っていたことでもあった。

Bからの返事もコピーされていた。

昭和十四年と書いたのは誤りだったと、やっと認めていたが、シュプレヒコールについては、「スタンドにいた彼等の口からきいた記憶があります」と断言していた。「侵略戦争」と書いたのは、「帝国主義戦争」の誤りです」と、あまりにもあっさり訂正している文章を読んで、加賀谷はすこし寂しくなった。詫びる姿勢が欲しかった。

Aは、当時観客席にいた東萊中学生を探しはじめていたようだった。たしかに、彼等にきくのが手っとり早い。確実なことが判明する。Bはそれをしたのだろうか。調べたのち、断固としてあの一文を書いたのだろうか。

それにしても、と加賀谷は心中をく。

「Aの執拗な追及は、意地からであろうか、老人の頑固さからであろうか……」

逮捕された生徒八十数名という数字や、刑の正確な実情についても、なんとかして調べてみるつもりです」とも書いてある。

Aをしてとことんまで突き進ませているのは、Bの姿勢が原因なのかもしれない、と彼は思う。Aが育った全羅南道の麗水での反政府事件で、国軍の制圧により百余名が死傷になったのは、戦後のことである。しかも、同じ民族同士で争い、この極刑である。あの戦争中、そして皇紀二千六百年という輝かしい年に、植民地の釜山で、朝鮮人が「打倒天皇！」と叫んで、生命が無事であったとは思われない。

Bは、このことに対して、どのような結論を擲んだのだろうか。想いを致さなかったなど、考えられないことであつた。

Aからの報せが無いまま年が暮れる。
正月二日、例年通り息子が帰宅した。都心の銀行の寮から奥多摩の実家まで、何時間もかかるわけではないのに、帰ってくることは少ない。
おつき合ひしているひとがいるなら、つれておいで、と母親が促す。早く孫をみたいのだろうと、加賀谷は晩婚の老妻の心中を測る。

息子は、知らん顔をしている。

父親へのお年玉は、杖である。

「本ばかり読んでいないで、ちゃんと散歩してくれよ。」

一段と頭頂が禿げてしまつてき。まるで瘦せ鶴だよ。

大阪に嫁いでいる娘からは、大晦日に電話があつた。そろそろ傷んでいるだろうから、二人にきれいなフレイムの眼鏡を送つた、と伝えてきた。外孫もまだである。

Aから郵便小包が届いたのは、春が近づいたのが森の芽吹きでわかる頃だった。

「御無音に過ぎましたこと、お寛し下さい。」

競技大会の日、観客席にいました東葉中生を、やっと探したことが出来ました。当時私たちと同じ四年生で、東葉中では級長をしており、卒業後私と同じ商大に入学しましたクラスメートの金琪俊君です。

「競技種目は、一〇〇メートル及び四〇〇メートル武装競争、八〇〇メートル障害物競争、走り高跳び（私はこの種目の選手として出戦しました）、走り幅跳び、懸垂、手榴弾投げ、砂袋運搬競争、非常呼集、担架競争、重量物揚げ、牽引競争、相撲、綱引き、武装行軍競争、等でした。」

幾度不当なる再試合、再採点をされても、東葉中と釜中の間に点数の差が大きく、我々東葉中が優勝だと思ひ切つた。最終種目の武装行軍競争で仮りに敗けることがあるにしても、総合点数では5という僅少差で優勝する計算になっていたのです。

ところが、審判委員長乃台大佐及び教練教官の審判員達は、東葉中の生徒達に不当なケチをつけて、減点作戦を振舞いました。悪いところ何一つないのに服装が悪いとか、故意にグートルをいじくつておいて、巻き方が悪いとか、ボタンをいじくつて外れるようにしておいてボタンのはめ方が悪い、等々、色々の手をつくして東葉中を減点させました。

そして、閉会式。

成績発表は、釜中が一位で、優勝旗が渡されました。

日本人審判員達の不正処置に対し憤りを禁じ得ず、遂に書き出し部分と同じく、不公平審判に対する憤りが引き起こしたのだと書いてある。独立運動として立ち上がった、といったふうな匂いは無い。

つづいて、シユブレヒコールの有無に関わる状況を書き

韓国から届きました金君の手紙のコピーを同封します。
「参考になれば幸甚です。」

コピーをひろげる。流暢な日本語である。
「御手紙有難く拝見致しました。感慨無量、万感交々たる心情です。」

私は昭和十八年二学期が始まらんとする直前に腸チブスに罹り、三鷹の隔離病院に収容されて、二週間入院。退院後は、三重県下の片田舎で療養生活を致しました。その間に、朝鮮出身の専門学校生や大学生に対して、学兵志願制度が施かれ、愈々く離れた少数を除いては、皆強制的に志願させられて一線に出陣しました。

大体出陣が終わつたと判断した時点で、一応故郷に帰る可く関釜連絡船に乗船したところ、船内にいた刑事に摘発され、学兵を忌避したとの罪目で、昭和二十年八月十五日の祖国解放まで、学徒労働者として徴用されました。現在の北朝鮮海州に所在していました小野田セメント工場の重労働に従事させられました。

終戦を迎えて帰郷しましたが、家庭の事情で学業を継続し得ず、英語教師として高校に就職しました。解放前より健康がすぐれず、学校にも行ったり休んだりでしたが、現在元気で、晴々しい毎日を暮らしています。

筆は、大会当日のことに触れる。
「あの『乃台事件』の発端は、不公平審判に因るものです。」と書き出してあつた。旧東葉中学や後身の東葉高校の生徒は、配属将校乃台大佐の姓をもじって、『乃台事件』としていたようであつた。

はじめる。

「私達は、『優勝は我々がしたのだから、優勝旗を渡せ』『日本帝国軍人も、不正審判を行うのか』等と叫んだり、日本の国歌が歌われるや、『ウーウー』とやじつたり、アランを混じえて歌つたり、『天皇陛下万歳』を唱える際には、『天皇陛下ゼンザイ』とやじつたりしました。」

やがて、『乃台殺せ』『日本人殺せ』（勸告下さい）と絶叫しました。夜の帳が下りつつある薄暗い黄昏の中で、投石が始まりました。

どこにも、『朝鮮独立万歳』『天皇制打倒』（あるいは『打倒天皇』『侵略戦争を止めろ』というグラウンドにおけるシユブレヒコールの文字は見当たらない。

閉会後、東葉中と釜山二商の生徒たちは、グラウンドの正門前に集まる。若者の憤激は収まらない。泣いている生徒もいる。

「私達は、音楽隊の吹奏に合わせて、市街に向かいながら歌いました。当時禁止曲となっていました。荒城の跡、アリラン、等です。」

そして、『朝鮮独立万歳』『日本人殺せ』『日本人帰れ』と叫びました。

行進中にも、『朝鮮独立万歳』など叫んでいない、という別の東葉中出身者の回想文を、後日加賀谷はAから入手することになる。一斉にその文句を叫んだわけではなかったのだから。

金琪俊の後便も同封されていたが、

「補足しますが、この事件は、社会主義者のリーダー達に

よって組織されたものではありません。「朝鮮独立万歳」とか「日本人殺せ」等の叫びも、誰かが先頭で先導してやったものではなく、銘々各自勝手に叫んだものです。」と書いてあった。

独立思想や抗日思想は、「学友会」という集まりの中で、上級生から教えこまれていたようだった。地下でそのような思想が営々と受け継がれていて当然のことだ、と加賀谷は思う。

東葉中の校長や教師たちの説得で解散したが、憤激は尚も収まらず、乃台大佐の官舎襲撃に移ったようだった。

官舎は、釜中の在る草葉町の隣の瀧州町にあった。官舎の向かい側は、日本人財閥の別荘である。

「夜八時頃、乃台官舎に着いた我々は、『乃台出て来い』『乃台殺せ』と叫びましたが、応答がなく、我々は門灯に投石して壊し、更に官舎のガラスドアに投石してこれも壊しました。」

金琪俊たちが戦後しばらくして発行した回想録に、朴淳鴻という同級生も「乃台事件」について触れており、その日本語訳もはいつていたが、官舎襲撃を次のように書いてあった。

「私は、大新町での行進のあと、電車に乗って瀧州町の自宅に向かっていたが、相生館の前まで来ると、『下車せよ』と合図された。下りてみると、夫々帰宅したはずの東葉中と生数十名が集まっていた。『乃台の家に抗議に行こう』と打ち合わせたように叫び、一気に大倉町を走り抜け、太陽堂の前の小路に入り、瀧台の丘へと急いだ。」

乃台の官舎は、私の家から僅か二〇〇メートル離れたところだった。私は毎日官舎の前を通過して駅まで歩いて行くので、自然と先頭に立っていた。

官舎前に集合した人数は百名余りであったと記憶している。正門の両脇にはぼんやりと外灯が点いており、門から玄関までの一〇メートル程には、小石が敷きつめてあった。

まず門を外して踏みつけ、外灯を打ち壊し、小石を拾って玄関に向かって投げつけたが、『乃台はおるか』『乃台出てこい』と大声で喚びながら、家の中は暗く何の応答もなかった。憤激した我々は、小石を玄関、窓、板壁に雨あられのように投げつけたので、窓ガラス等の壊れる音が瀧州町一帯に響き渡った。

あとで聞いたことだが、北支戦線で戦死した陸軍中尉の独り息子位の位牌まで投石で壊れており、乃台大佐は激怒したという。……

釜山警察による検挙は、早朝から始まっている。逮捕者の人数は明確ではなく、金琪俊は留置三日後に釈放され、十日間の停学処分を受けただけのようだった。

拘束送庁者数、一、二、三審判決、退学者数など、金琪俊はAの問合せに克明に答えていた。Bの投稿文中の「六十数名が退学」という数字は違っていた。

●「二審」釜山地方法院

懲役八カ月・十二名
東葉中八名（九名送庁の内一名は十八歳未満のため、執行猶予三年）

釜山二商四名（六名送庁の内二名が右同）

●「控訴審」大邱覆審法院

東葉中の一名無罪、十一名は原審通り確定。

●「上告審」京城高等法院

東葉中の一名が上告棄却。

●「両校の自主的処罰（服役者を含む）」

東葉中「退学九名（五年生八名、三年生一名） 停学三十四名（五年生十五名、四年生十九名）」

釜山二商「退学十二名（五年生三名、四年生七名、三年生二名） 停学十名（五年生六名、四年生二名、三年生二名）」

読賣十名（五年生五名、四年生五名）

金琪俊の長文の手紙は、意気こんだ文章で次のように結ばれていた。

「この事件は、日本の軍国主義と日帝の象徴である乃台大佐によって引き起こされた為、俗に『乃台事件』と称されていますが、同事件の本質を掘り下げて行ってみれば、決して一介の日本人に対する抗争ではなく、実に日帝と戦争に対する学生達の抗争であり、反日抗争であり、抗日運動であったのです。」

当時、徹底的な強圧と報道管制に依り、広く波及せず、従って「三・一運動」とか「光州学生事件」のように、全国的、統一的、組織的抗争となり得ずして、釜山に於いてだけの局地的抗日運動になり終わってしまったのです。加賀谷は、顔を起す。

東葉高校開校九十周年に際して発行された冊子にも、

「乃台事件」に関する記事があるが、この事件を抗日義挙として扱った。

五十年前のできごとを回顧して、抗日運動、あるいは抗日義挙と讃える心情は汲みとれる。しかし、刑は、思想問題として扱っていなかった。「暴力行為等処罰に関する法律違反」として裁いている。運動ではなく、乃台大佐邸襲撃の騒ぎとしての処罰である。極刑ではなく、八カ月の懲役である。家族にも捜査の手がのびていない。思想犯であれば、家族もろともであろう。

彼は、金琪俊の後便を読み返す。「銘々各自勝手に叫んだ」とある。これでは抗日運動とはいえないのではないだろうか。

パコダ公園における「三・一運動」にしろ、義烈団による相次ぐ警察署或いは二重橋の投弾事件にしろ、併合後十一年後のことで、極刑にすれば朝鮮民衆の騒ぎを引き起こしかねなかったが、それでも多数を射殺し、死刑にもした。波及を危惧するよりも、断固たる処置をとった。

大新町のグラウンドに端を発した騒ぎは、皇紀二千六百年という輝かしい年のことである。戦いは勝ち進み、抗日運動は朝鮮金土から影を潜めてしまっていた。その奉祝の年に、朝鮮総督は創氏改名を高姿勢で要求している。一つの国を、完全に併合してしまつたのである。

併合された者たちに、抗日、反日の気持ちは、当然あっただろう。しかし、抗日運動の思想犯であったならば、極刑を科したのではないだろうか。

Aは、入手したものを加賀谷の判断に供するために次々

と送ってくるだけで、自分の感想を述べることを一切してない。

手紙には次のようにあった。
「東大中の卒業生で、本件を思想事件と記憶している者は30%ぐらいだ、と言っている方がいます。差別への不満は鬱積しており、投石事件を起こしたが、独立万歳などのシュプレヒコールなどは絶対にあり得なかったと、70%の方は記憶しているそうです。当時処罰を受けた方でも、単なる投石事件であつたと、現在証言しているそうです。」

加賀谷の感想を性急にたずねることもしていない。

7

資料が又届いた。二カ月から三カ月おきに、必ず配達されてくるのである。

Aは、観客席のシュプレヒコールについて、なおも調べつづけていた。

都内に本社を、千葉・船橋に工場を有する化学工業会社社長の辛容午という東大出身者を探しだしていた。事件当時四年生で、手榴弾投擲競争に出場していたようであつた。

不公平な点数への不満が昂じ、やがて、どこからともなく「乃台殺せ」という叫び声があり、何が何だかわからないまま一緒に叫んでいました。と、この社長はAに書いているが、やはり、一斉のシュプレヒコールといったものではない騒然とした光景が浮かぶ。

投稿文にあるような激しい怒号は、観客席から本場に投

げられたのか。Bは、聞いたのか？

グラウンドで解散して帰宅した彼は、空き腹にキムチでごはんをかきこんで寝る。翌日登校した彼は逮捕され、留置場で「用便も看視されている前でなくてはならない人」最大の屈辱を味わったものの、無実ということで釈放される。

彼は乃台投石に加わっていない。処罰者はやはり乃台邸投石関係者で、グラウンドの観客席での騒ぎは、処罰の対象になっていない。

こういうことは、投稿文にあるような独立運動の気勢は無かつたことになる。

Aはそのことを暗示しようとしたのではないだろうか、と加賀谷は考える。

次の郵便物は目を描かずに来た。
当時釜中一年生だった後輩からA宛に手紙がきたよう

で、このC君は、現在辛容午氏の会社に籍を置いています。とAは書き添えてあつた。

Cの父親は東大中の数学教師であつた。釜中の教諭教官の中尉の不当な言いがかりに、父親も日本人として、怒りを表明しようだった。不当審判があつたことを、加賀谷は再確認する。

そのことよりも、彼の眼がCの手紙にひきつけられたのは、Cの伯父（父親の兄）が韓国独立運動実践行動隊の急先鋒で、併合運動の反対者として、明治三十九年（併合の四年前）憲兵や壮士たちから惨殺されている一事であつた。

伯父は、当時三十七歳。

父親の周辺に、特高警察の眼が光りつづける。執拗で陰険である。昭和八年、父親は都内の有数な大学進学校校長の職を捨て、家を売り払って、家族を連れて朝鮮に渡つた。

それでも、定期訪問、という名目の特高の眼は、伯父の死後何十年経っても、Cの一家に光りつづけるのである。

身内の誰かが軍隊の学校に入学すればよいのである。天皇の股肱の臣の一家に、眼を光らせるわけにはいかない。

昭和十九年、五年生のCは決心して、陸軍特別幹部候補生として航空隊に入隊した。すると、ぱったりと特高の訪問が無くなったのである。

思想犯及びその系譜者に対する扱いの厳しさは、日本人であれ徹底していた。まして、日本人が当時軽視していた朝鮮人が、それも心を一にして戦わなければならない戦時下には、Bが耳にしたというようなシュプレヒコールをしたならば、懲役八カ月の微罪ですんだであらうか。

Aはこのことを暗に告げようとしたのではないだろうか、と、加賀谷は又量るのである。

「辛容午社長も、それから私が最近釜山市でお会いしました辛社長と同級生の一人も、「朝鮮独立万歳」「天皇制打倒」「日本帝国主義打倒」「帝國主義戦争反対」などともない。そんな言葉を出していたら、機関銃をプチこまれていたよ。しょっぱかれたあと、殴り殺されただろう、と言っていました。」

Cは最後に、六十歳代の半ばになっているとは思われな

い激しい言葉を書きつけていた。

「文字にした誤りは、文字を以て訂正すべきでしょう。余りにも無責任であり、怒りを覚えます。過去の出来事を美化高揚すべきではありません。歴史の事実は、正確に発表すべきであり、歪曲してはならないのです。」

8

A・B間の最終の数通の手紙のコピーがまとめて送られてきたのは、年の暮れ近くであつた。

Aが最後まで一貫して追及しているのは、シュプレヒコールであつた。

●AからBへ

「日常の被差別が、不公平審判をきっかけとして、偶発的な団体行動となり、それが投石事件となったものであつて、これを独立運動としたり、抗日運動の義挙とすることには、私は賛成しかねます。」

当時の独立運動は、忍耐を要したもつと地道なものであり、当局の餌食となることがわかつてはいる衝動的な行動を賞讃することは、真の独立運動を侮蔑することになるのではないかとさえ思います。

君の「独立運動を目標」によると、朝鮮独立万歳、及び天皇制、侵略戦争反対——以前指摘したかと思いますが、これは戦後の日本に於ける左翼運動のテーゼです——のシュプレヒコールが、東大中生徒によって大新町のグラウンドで行われたとあります。このテーゼが唱和されているか

ら、明らかに独立運動である、と君は言うのでしょ。

当時グラウンドにいた東葉中生徒の回顧でも、「独立万歳」「天皇制打倒」「侵略戦争反対」という唱和は無く、単に「乃台殺せ」「東葉中の優勝だ」「優勝旗を渡せ」と叫び、君が代斉唱には「ウーウー」と野次ったとあります。

テーゼは、君の創作です。

君は、一九五八年（昭和三十三年）勤務していた工高の校内誌に投稿して以来、最近はその著名出版社の月刊誌などを含め、四度も同じ内容のものを投稿しています。シュプレヒコールがあったとすれば、思想問題であり、それこそ独立運動のはしりで、単に偶発的な反日事件とはいえないでしょう。

そのシュプレヒコールそのものが、東葉中生徒によって否定されているのです。釜山警察署における東葉中生徒、釜山二商生徒取調べの詳細な記録は、全く入手できませんが、シュプレヒコールがあったとすれば、再三申しますように、八カ月の刑罰ではすまなかったでしょう。

●BからAへ

雪の寒さには手足が硬直して、歩行が困難になり困っています。

貴君は、日常の反日感情が軍人による審判の不公平に反発し、反日行動にでたもので、これを直ちに独立運動としているのは誤りだと言います。

私は、運動の底流に独立運動を感じ、戦後この事件を繰り返し思い出すたびに、組織の存在を感じました。

私の投稿記事の弱点は、すべて自分の記憶に頼っていることにありますが、判断に大きい誤りはないと思います。紀元二千六百年という皇国史観の高揚した時期に、釜山という最も日本化した都市で事件が起きたことに、重要な意味があると思います。

中学四年生で、運動の底流に独立運動を感じた早熟の生徒が、帝国主義戦争の意味がわからなかったのだろうか。加賀谷は首を傾げる気持ちを抑え、読みすすめる。

Aも同じことを書いていた。

●AからBへ

「運動の底流に独立運動を感じ」は、「事件の根底に反日、抗日、そして民族意識の存在を感じ」たと言うべきではありません。

民族独立運動を感じながら、帝国主義の意味も知らないということ、あり得ないことです。

更に、「組織の存在を感じ」たということは、戦後の君の想像の産物です。

民族独立運動の地下組織の洗礼を受けていた東葉中生徒が、差別審判に反発して「乃台殺せ」と叫び、官舎への投石の主導者になったのでしょ。組織の洗礼を受けていない生徒も、民族意識から当然審判の不正を叫んだのだと思います。

しかし、「独立万歳」「帝国主義戦争反対」「天皇制打倒」などのシュプレヒコールを、「秋の夕べの日が釣瓶のよう

秋の夕べの日が釣瓶のように落ち、暗くなったグラウンドの真ん中に集まって小さくなっていった私は、スタンドから聞こえてくる怒声を、耳をそばだてて聞いていました。

「朝鮮独立万歳」は、当然だと思いました。「天皇を殺せ」と聞こえて、これは激しいなと思いました。天皇ではなく、「乃台を殺せ」と言ったのを、そう聞いたのかもしれない。問題は、「帝国主義戦争反対」です。栄えある大日本帝国の「帝国」主義を非難的に使っていますが、勿論意味はわかりませんでした。

「帝国主義戦争反対」は、高度なスローガンです。組織の教育を受けなければ理解できない政策です。朝鮮の中学生がそこまで高い意識を持っていたことを、戦後になって知りました。事件当日のリーダーは、上部組織につながる者であろうと思いました。

一九四五年（昭和二十年）八月十五日を境に、地下に潜っていた者は表に出てきて、各地の民主化の先頭に立ったのです。そしてその組織は、アメリカ軍と李承晩政権によって破壊されたのです。私と同年の者は、当時二十一、二歳で、最も活動的な年齢です。中等学校を卒業している彼等は、知識人として期待され、先頭で活躍したでしょう。

そして、おそらく彼等は、反動的な権力に一網打尽に捕われたでしょう。

この事件を朝鮮独立運動と結びつけて理解できる指導者は、いまはもう存在しないと考えるのが妥当でしょう。

に落ち」たグラウンドで、「怒声を、耳をそばだてて聞いていた」という文章は、「組織の存在を感じ」たと同様に、君の戦後の幻想的美辞麗句だと思います。

目標の成算もなく、犠牲者が発生する過激なシュプレヒコールは、組織の破壊を招くリスクがあり、組織のメンバーのするところではないでしょう。

事件は、東葉中生徒や組織の計画的なものではないということ、明瞭です。「高度なスローガン」という評価も、君の創作と言えましょう。

首謀者として懲役八カ月の刑罰、更に退学になった当時五年生の金榮照、安長遠二氏のハングルの回顧録が、金現俊君から送られてきました。——事件の渦中の人で、私と商大同期の金現俊君については、同氏からの手紙をコピーして君に送りましたから、ご記憶にあることだと思います。

金榮照、安長遠二氏の回顧録にも、「帝国主義戦争反対」「天皇制打倒」「朝鮮独立万歳」などのテーゼは叫ばれていません。しかるに、何故、君のそばだてた耳に聞こえたのでしょうか。

「事件当日のリーダーは、上部組織につながる者であらう」と君は推測していますが、リーダーとして刑罰を受けた方々が健在であることを知りながらの推測は、事件を自己の想像の世界で独善的に構築しようとしている、と言わざるを得ません。金現俊君も、上部組織という君の想像の産物について驚いておられます。

「この事件を朝鮮独立運動と結びつけて理解できる指導者は、いまはもう存在しないと考えるのが妥当」だとする独善的思考の言辭は、撤回すべきでしょう。事件の当事者が生存しているのです。その人たちに問い合わせせず、身勝手な想像はすべきでないと思います。

独立運動の地下組織は、グラウンドでの騒乱や、配属将校官舎への投石などの、安易で無計画で思考に欠けた行動は避けたと信じます。

自己中心の想像の画像に自己陶酔していると、皮肉を言ってみたくもなります。当時の先輩、同級生、後輩の意見や記憶を、どの程度確かめたのですか。

想像で構築されたテーゼの記述は、訂正しなくてはならないのです。

●BからAへ

「投稿した文章に大きな誤りは無かったと、いまだに思っています。繰り返しますが、『××を殺せ』を、『天皇を殺せ』と聞いて、激しいな、と感じました。

「××」は、『乃台』であつたかも知れません。『帝国主義戦争を止めろ』について、『帝国主義』の意味がわからず、疑問のまま五年程過ぎたわけです。

しかし、大筋に誤りは無いと思っております。

生徒たちの反抗に対して、教師は必死になって抑制しようと努力したであろうと推測します。穏便に処理しないと、教師の立場がなくなります。

しかし、生徒たちは最後まで教師たちに妥協しようとは

せず、結束して抵抗をやり抜いたのは立派であつたと思います。『民族独立』を叫ぶことのほうが重要であつたからでしょう。東葉中と釜山二商の生徒が結束して闘ったところに、民族独立闘争の意味がでてきます。釜山中学と東葉中学の優勝に関わる争いを越えています。

事件の本質は、民族独立闘争である、私は常に考えています。従って、この事件を『乃台事件』と呼ぶのは、問題を現象的にしか表現して、むしろ『釜山グラウンド事件』と称したほうがよいのではないかと思います。

貴君から激しい調子の言葉を投げつけられると、かっとなることがあり、気持ちが疲れます。

●AからBへ（最後の手紙）

「君の独立運動本質論では、テーゼのシュプレヒコールがあつて当然なのでしょう。これを私は幻想であるとして、釜中生、東葉生に問い合わせてつづけてきたのです。

君は、主張を立証しようともせず、シュプレヒコールをひたすら確信しているのです。

そのテーゼの記憶は、日本人の君だけなのです。

君は大変なことを書いています。『私の投稿記事の弱点は、すべて自分の記憶に頼っていることにありますが、判断に大きい誤りはないと思います』と。

テーゼのシュプレヒコールは記憶違いらしいが、独立運動に関係があることだから、『独立運動を目標』と題しても大きい誤りにはならないと、自分の心を甘やかしていることに気付かないのでしょうか。

「乃台事件」と呼ぶのは、本質をみすへた現象的表現、という新見解には驚きます。『釜山グラウンド事件』と呼称しても、現象的表現になるのではありませんか。

シュプレヒコールなど、全く無かつたのです。終幕としましょう。

これ以上のやりとりは、無意味のようです。

二年に及ぶAの追及は終わる。

Aは、Bの姿勢に対する激しい感情の一面を、最後の手紙で初めてみせていた。

加賀谷民夫は、Bの投稿文を脳裏にひき寄せる。Bの耳は、グラウンドでのシュプレヒコールを聞いたという。戦後、Bは、隣国に対する三十六年間の自分の国の所業を知るにつれて、いたたまれない気持ちになつたかも知れない。

同時に、屈辱を耐えてきた人たちに、詫びたかった。大新グラウンドの騒動を遠く想起したとき、抑圧された朝鮮系学校の生徒たちの怒号の中に、『朝鮮独立万歳！』

のシュプレヒコールを、Bは聞こえた。少年たちに、思ひのたけそう叫ばせたかった。

そして、Bの耳に、自分がつくりだした幻聴が、真実の声として残り、そのシュプレヒコールを信じ、四度も投稿をつづけたのであろうか。

シュプレヒコールなど、無かつたのである。Aの執拗とも思われる二年に及ぶ調査の結果である。Aは、そこまでしなくてはならなかつたのだらう。

戦争遂行の時局下に、朝鮮独立万歳なそのシュプレヒコ

ールがあつたなどという不合理な事象を、Aは認めるわけにはいかなかったのだらう。釜中生、東葉中、無口で温厚で、どこまで難問にとり組んでいたAの顔が浮かぶ。

捏造された美談で、隣国の人たちが喜ぶはずはない。それは、かえって、侮辱を与えることにさへなる、と加賀谷は思う。

しかし、Bはなぜか訂正しようとしないのである。文字にした誤りは、文字を以て訂正すべきですと、怒りを表した後輩Cの要求にも、Bは応じていなかった。

加賀谷は眼をとじた。亀峰山が浮かんだ。それから、澄みわたった空が、釜山港が、松島が――。

植民地にしてしまった朝鮮での、しかも病弱だった少年時代の風景だが、七十近くになっても惹かれるものがある。

Aも、Bも、隣国に寄せる想いは同じはずである。自分の国のかつての行為を、隣国に詫びる気持ちも――。

幼友達であるだけに、Aは相手の頑なさや徹底的に立ちむかつた。そうしなければ、少年時代の風景が歪められる。

窓ガラスが、小さい音をたてつづけている。暮れかけた森を背景にして、粉雪がはげしく舞っている。投稿をそのまま掲載した權威ある月刊誌の意向を問いに、Aは老軀をおして編集責任者に会いに行くことになるだらう、と加賀谷は思った。